

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 堅田 陽子

論 文 題 目

井原西鶴と古典文芸

論文審査担当者

| | | |
|----|----------|--------|
| 主査 | 名古屋大学教授 | 塩村 耕 |
| 委員 | 名古屋大学教授 | 阿部 泰郎 |
| 委員 | 名古屋大学准教授 | 大井田 晴彦 |

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文の目的は、井原西鶴の作品を研究する上で、〈作品と同時代の人の眼〉を得ようとするものであるという。そして、同時代の人であれば知っていて、現代人にはわかりにくくなっている文脈として〈典拠〉と〈巷説〉との解明をテーマとする。この場合の〈典拠〉とは、術学的なものではなく、ある場面を描く際に、よく知られた素材を背景にして文章化することという。そして、当時の〈巷説〉は、既に種々の古典の世界と重ね合わせられたものが多いとする。

第一部では、後世へ最も影響力の大きい古典である『伊勢物語』を、西鶴がどのように利用しているのかについて論ずる。第一章では、『伊勢物語』の中でも有名な、業平が二条后を盗み出す第六段（芥川段）を踏まえた『好色一代男』「形見の水櫛」と、男が女を背負って逃げるという芥川段を思わせる挿画をもつ『西鶴諸国はなし』「面影の焼残り」と『好色五人女』「小判しらぬ休み茶屋」を取り上げる。それらを比較検討した結果、中世の古注釈以来の伝統的な『伊勢物語』解釈とは異なり、西鶴は芥川段を、女からの最期の問いかけに答えられなかった男が自責の念に苦しむ物語と読んでいた可能性を指摘する。

第二章では、前に共通して芥川段を踏まえたとした「面影の焼残り」と「小判しらぬ休み茶屋」の両話について、何れも『源氏物語』宇治十帖の浮舟物語をも意識的に利用しているとし、それは既に浮舟物語が芥川段の影響下にあるものとして読まれていたことによるとする。

第三章は、『諸国はなし』「大晦日はあはぬ算用」について、本文内容に相応しない挿画を、江戸期の『伊勢物語』版本に見られる、女流歌人伊勢の画像を踏まえたものとし、伊勢が家を売り払うまでに零落しても運命に恬淡としていた説話を暗示的に利用して、主人公に清貧に甘んじる高潔なイメージを帯びさせているとする。

第二部は、『好色五人女』に用いられる古典の原拠を論ずる。第一章では、巻二の主人公樽屋おせんについて、素材となった密通事件がどのように巷間で語られていたか、歌祭文類によって考証し、おせんには、直前に上演された近松門左衛門の浄瑠璃『世継曾我』の大磯の虎と重ね合わせる悲劇の貞女と、愚かな好色者という正反対のイメージがあり、西鶴はその両方を矛盾なく巧みに作中に取り込んだとする。

第三章では、巻三の主人公大経師おさんについて、同じ事件を扱う近松の『大経師昔暦』、歌祭文類、事件記録を分析して、おさんを『源氏物語』の女三宮のイメージと重ね合わせる見方が既に世間にあり、西鶴はそれを踏まえて、複雑に『源氏』を利用しているとする。

付論「西鶴の総合的な本づくりについて」は、上方で作られた『諸国はなし』が、殊更に江戸版風の装丁で、内題が外題とは異なり「大下馬」とあることの意味を、西鶴の総合的な造本意識として解明しようとする。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

西鶴は、創作の際に原拠を用いることが多いが、その利用の方法は直接的ではなく暗示的で、また原拠に変形を加えるのが常であるなど複雑であるため、未解明の部分が多い。そして、複雑であるだけに、個々の指摘によって原拠を認定することには困難が伴う。本研究はその難しさを、複数の作品について類似の原拠利用の技法を指摘することにより、原拠認定の妥当性を補強しようとしており、それはこの種の、動もすれば主観に陥りやすい論証に有効な方法であると考えられる。

本論文の評価すべき点は、まず原拠となった『伊勢物語』や『源氏物語』などの古典について、中世の古注釈より近現代の評釈まで丁寧に検証し、西鶴の同時代にどのように読まれていたかを考証した上で、西鶴がそれをどのように読み、利用したかを考察している。また、西鶴が一般的な読み方とは異なる独自の解釈をしていたと推定する論は、西鶴が古典をどのように享受し、それを新たな文学創作に利用していたかを考える上でも、重要な指摘となっている。

西鶴本が挿画によって暗示的に原拠を示しているとする論は、単に挿画の構図の類似の指摘にとどまらず、本文の読みに還元している点が評価される。たとえば、『諸国はなし』「大晦日はあはぬ算用」の主人公は、本文では矛盾した人間性が見られてわかりにくいのが、挿画により女流歌人伊勢のイメージを重層的に見せ、清廉高潔な武士気質を強調しているとする論は説得力がある。

さらに『五人女』の原拠の巷説についての論では、事件記録、事件を扱う歌祭文、同じ事件を扱う他作品などに丹念に検討を加え、既に巷説の段階で、事件譚に、古典文学の世界を重ね合わせる見方があったと指摘するが、これは従来にない視点で、原拠を利用した西鶴の創作方法の解明に、精緻さを加える見解となっている。また、江戸時代前期に於ける巷説の流布のあり方についても、新見を呈している。

付論は、『諸国はなし』の内題「大下馬」の意味について、江戸版風の装丁にこめた西鶴の造本意識により、江戸城大下馬を意識させるもので、同書刊行時期の正月に、諸大名の初登城で賑わう大下馬で交わされる、まさに諸国のはなしであることを意味しているという。妥当な見解と思われ、原拠研究とは異なる、本の造りという観点から、同時代的にどのように解釈されたかを推定している。

ただし、原拠となった古典の解釈史についての検討を精密に行うあまり、西鶴論としては逸脱している部分が見られること、また、西鶴の古典利用について先行研究の蓄積を整理して示したならば、より理解が深められたこと、が惜しまれる点である。しかしながら、本論文は、古典の原拠と巷説とをめぐりコンテクストを探求することにより、同時代的な読みを目指すという、西鶴研究の最も困難な課題へ正面から取り組んでおり、高く評価される。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。